

やまとの枕詞「そらみつ」って何？

葛西 ひとみ

何年か前に東アフリカでサバクトビバッタが大発生した。

テレビに映る何万、何十万匹もの空中を埋め尽くしているバッタが日本に来たら農作物の被害は甚大だろうと脅威に感じていたが、ふとある言葉が浮かんだ。

「そらみつやまと」

何ゆえにそんな言葉が唐突に出てきたかという、空が見えないくらいのバッタの大群に、以前から気になっていた万葉集の枕詞が自然とリンクしてきたのだ。

筆者は枕詞「そらみつやまと」を定説とは違う意味に捉えている。

「そらみつ」は万葉集第一巻、一番・二番歌などに出てくる地名「やまと」にかかる枕詞で、ニギハヤヒノミコトが天磐船に乗って空から大和を見下ろしたので「空見つ大和の国」というのだと日本書紀はいう。(ただし、語義・係り方未詳 日本書紀 岩波文庫)

筆者はその神話的説明よりももっと語源を知りたい。

そこで至った考えが「そらみつ」とは「空・見つ」ではなく「空・満つ」ではないのかということなのだ。

東アフリカのバッタのように、「やまと」の空にも何かがいっぱい満ちていたから「空満つやまと」といったのではないかと考えている。

柿本人麻呂の二十九番歌では「やまと」の枕詞が「そらにみつ」と歌われ、「みつ」の部分は「満」という漢字で表されるのだが人麻呂は空に何が満ちていたと思っていただろう。

「見る」の「み」も、「満つ」の「み」も上代特殊仮名遣いでは同じく甲音で一致する。

「満つ」は満ちることで自動詞の四段活用は上代からあるという。(古典基礎語辞典)

一方「そらみつ」に係る「やまと」には「あきづしま」という枕詞もあり、古代の空に満ちていたものとはトンボではないかと思い当たった。

虚見津 山跡乃国 (そらみつ やまとのくに 一番歌)

蜻嶋 八間跡能国 (あきづしま やまとのくに 二番歌)

万葉集二番歌に出てくるあきづとは蜻蛉(トンボ)の古語で、全国方言一覧辞典によると現代でも沖縄では「アーケーजू」として残っている。

「やまと」があきづ、つまりトンボのいる国であることを踏まえると「そらみつ」が意味するのは「空・見つ」ではなく、「空・満つ」の方がふさわしくはないだろうか。

日本列島に太古からトンボ類が生息していたのは山口県美祢市周辺の中生代の昆虫化石などから確実だが(日本の絶滅古生物図鑑)、空中を満たすほどのおびただしい集団で飛び回るのは恐らく、かんがい農法で稲作が広まってからだろう。

筆者の生まれ育った町は米どころで、子どものころに数百匹のトンボが黒い雲のように群れて低い空を飛んでいくのを見たことがある。

ましてや、排ガスもなく、空が澄み切っていたころならばどれほどのトンボがこの国にいたことか。

福岡市の板付遺跡は紀元前 10 世紀頃に作られた、かんがい施設を持つ大規模な水田跡だが、その時代の上空には今では想像のつかないくらい多数のトンボがいたに違いない。

トンボは弥生時代の青銅器、銅鐸(出雲岩倉 18 号銅鐸他)にも描かれるほど豊作祈願の象徴であるし(銅鐸の絵を読み解く 佐原真)、空中を埋め尽くすトンボがいる国「やまと」を褒め

称えたことが「そらみつ やまと」という語の由来に思えるのだがどうだろう。

ただし、ひとつ疑問があった。

「空満つ あきづしま」ならばトンボのことだと理解できるが、「空満つ」の次に「やまと」と続くのは不自然ではないのか。

そんなことが頭の片隅にいつもあったのだが、実は偶然「やまと」とトンボとが結びつくヒントになることばを見つけた。

それはなんと、やまとことばではなく「野馬」という漢語でその語は「莊子」の中に出てくる。

莊子は紀元前、中国上代の思想家で諸子百家の一人だ。

諸橋轍次の「莊子物語」の中に莊子の言葉として野馬塵埃という語が出てくるのだが、この「野馬」とは野にいる馬のことではなく春の野に漂う陽炎（かげろう）だという。

野馬という語は藤堂明保他編の新漢和大辞典によると古訓で「カケロフ」と読む。

カケロフ、つまりカゲロウといえ日本では陽炎、蜻蛉の両方を指す。

古代の日本人は陽を浴びてユラユラと漂う概念を持つ陽炎と、ふわふわと空中を飛ぶ蜻蛉の両者をどちらもともにカケロフと言った。

さらに同辞典では野馬という漢語を隋唐時代（581年～907年）の中国中古音で復元してみると *yiamba*、或いは *yiam* となるのであるが、この中国中古音がアルファベットを頼りに声に出してみると聞き覚えのある日本語になるのだ。

日本に「やんま」というトンボがいるではないか。（ちなみに現代中国語では野馬は *ye ma*）

東條操の物類称呼によると「やんまはエンバの転ぜし也」とあり、先の全国方言一覧辞典では福岡方言でトンボを「イエンバ」と呼ぶのだそうだ。

「イエンバ」とは元は漢語で陽炎の意である野馬であり、日本語に取り入れられたときにトンボの一種「やんま」となったのではなかったか。

「イエンバ」と「*yiamba*」、「*yiam*」は偶然にしては音が似すぎに思えるのだが。

ところで、現代中国語でやんまの一種、オニヤンマは馬大頭（*ma da tou*）といい、野馬と同じく「馬」の字を持つのだがこれはどうしたことだろう。

中国には虫偏に、つくりが馬と書く「馬」と同じ発音を持つ漢字があり、その字は中国の方言でトンボを指す俗称に使用される（中日大辞典）のだがそれと何か関係するものなのか。

ともかく、中国語で「馬」の字が昆虫名に使用されることは日本語のやんまが漢語由来の「野馬」であることの傍証になりはしまいか。

隋唐時代、あるいはさらに古い時代に陽炎のことを「野馬」という名で呼んでいた人々が陽炎の本来の意味を変遷させ、野馬は「やんま」、「イエンバ」というトンボの名に生まれ変わったという気がしてならない。

そしておそらくその人々とは渡来系の集団か、その集団と言語接触を持った先住民であろう。日本では「カケロフ」がトンボと陽炎の両方を指し、莊子が生きた紀元前の中国では「野馬」が陽炎を意味し、それが「やんま」の語源だとしたらおもしろい。

語義・係り方未詳とされる「そらみつ やまと」とは、「そらみつ」は「空満つ」で、やまとの「やま」の音と「やんま」が縁語として掛けてあるからトンボを想起させる枕詞として成立していったのではないかと解いてみた。

福岡方言でトンボを指す「イエンバ」として残る「やんま」の語源は「野馬」であり、やまとの地平線まで続く田んぼの上で陽炎（かげろう）のように空中を満たしていたに違いない。